

自然科学系研究力低下が顕著な日本 ノーベル賞受賞者が危惧する研究費不足

米国の社会学者に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と呼ばれた1980年代の日本の面影は今は昔で、バブル経済崩壊後の「失われた30年」を経て隔世の感がある。米国に次いで世界第2位を誇った日本の自然科学系研究力も衰退の一途を辿った。小泉・安倍政権と続く「選択と集中」政策の失敗は明白だ。

低下する一方の日本の自然科学系の研究力

21世紀に入り、自然科学分野で日本人のノーベル賞受賞が相次いでいるが、受賞者は異口同音に昨今の日本の研究力低下を危惧している。今年のノーベル賞に輝いた坂口忠文さん（生理学・医学賞）・北川進さん（化学賞）も「**基礎研究への支援と若手研究者を支える組織づくりの必要性**」を強く訴えている。

日本の論文数は、21世紀初頭まで米国に次ぐ世界第2位だったが、現在は中国・米国・インド・ドイツに次いで**第5位に下落している**。被引用数トップ10%論文では、韓国やイランより下位の世界第13位に転落し、論文数自体が減少している。もはや日本は科学技術「先進国」とは言えなくなりつつある。

外部資金の獲得で産業界の下請け化される大学

「聖域なき構造改革」を掲げた小泉純一郎政権の下で、**国立大学の法人化後、2004年度から基盤的経費である運営費交付金は10年間で約1,600億円減額されて、各国立大は深刻な財政難に陥った。**

当然、人件費抑制が図られ、退職教員の補充が正規教員から任期制教員へと移行し、**特に若年・中堅教員の任期制化・非正規化が進行していった。**

研究費も徐々に減額されて、外部資金の獲得に奔走することとなる。**国の競争的研究資金の採択に向けた事務的作業が肥大化し、研究時間は減少の一途を辿る。**特に自然科学系は、民間企業からの受託・共同研究費、研究助成金（奨学寄附金）の確保をめざして、産業界の思惑通り産学協同路線が推進されていく。**自由な発想にもとづく多様性のある基礎研究から、産業界の意向に沿った短期的な研究成果を求める応用・開発研究指向へと重心が移っていった。**

総合的研究力を低下させた研究費の「選択と集中」

小泉政権下での研究費の「選択と集中」は、安倍晋三政権下で加速され、**トップダウン型の競争的資金が「上」から特定テーマに資金投入されていく。**東大・京大を頂点とする一部の国大に資金が流れて、**大学間格差が一層拡大し、研究の多様性は失われていく。**さらに、産業界と連動した国際卓越研究大学の特定分野に超大型資金が流れる制度が導入された。

結果として「**選択と集中**」政策は、日本の自然科学系研究力を偏在化させ、総合力を低下させた。

論文数の各国比較表（分数カウント法・年間平均数）

	国名	2001-03年		国名	2021-23年	増加数
1	米国	207,132	1	中国	599,435	564,239
2	日本	66,694	2	米国	289,791	82,659
3	ドイツ	50,883	3	インド	91,997	74,683
4	英国	49,639	4	ドイツ	72,762	21,879
5	フランス	36,734	5	日本	70,225	3,531
6	中国	35,196	6	英国	65,203	15,564
7	イタリア	27,559	7	イタリア	60,712	33,153
8	カナダ	24,799	8	韓国	58,382	42,900
9	ロシア	20,272	9	フランス	44,976	8,242
10	スペイン	19,338	10	スペイン	44,789	25,451

出所 文科省科学技術学術政策研究所「科学技術指標2025」

明治維新は「最悪の選択」か

小美野 昌泰(元労働基準監督官)

網野の主張

日本中世史の泰斗網野善彦は、明治維新は「最悪の選択」という驚くべき主張をしている。

網野善彦 石井進『米・百姓・天皇－日本史の虚像のゆくえ』(ちくま学芸文庫 2011年)、この対談の中で「私は、『日本社会の歴史』ではっきり書いてみたんですよ、「最悪の選択だ」といったのです。その点について、松本健一氏に質問されました、「どうして最悪なのですか」ってね。しかし最悪としかいいようがありませんとお答えしたのです。」と述べている。

対談で主張された明治維新は「最悪の選択」

「網野 江戸時代は、いかに身分制がきびしく暗い社会で、商工業の未発達な社会だったかといって、これを「一新」するのだというわけですが、それは同時に、端的に言って「遅れた未発達なアジア」を切ることであるのです。江戸時代の封建社会を切り、「遅れた未発達なアジア」を切り落として、欧米に顔を向け、その技術を吸収する方向に向かっていく流れが主流になったといえます。(中略) 明治政府の選択が最悪の道といったのはこうした点で、それ以外の道もありえたと思うんです」「石井 やっぱ、当時の状況の中で生き残るために選択の幅はほとんどなかったという説に賛成したいですけどね」「網野 皆さんそれを必ずいわれるんです。どういう道がありましたかという反論が必ず出ます。松本さんもそうでした。私は負けたらよかったと思っているんです」「石井 それなら植民地ですよ」「網野 どうしても仕方なければ植民地になった方がよかっただろうということです。同じ運命をたどっているアジアの人々を抑圧して、自分だけ成り上がるより、ずーっと、その方が人間的だと思うんです」

『日本社会の歴史』における網野の主張

「日本国自体について、神々の創った国土に天から降った神の子孫=天皇の統治する国であるという記紀の神話を「事実」として「国史」の教育を行い、さらに日本人を「万世一系」の天皇の支配下において、「血統」の上でも天皇につながる均質ですぐれた「大和民族」ととらえる意識を植えつけた。そしてこの見方から、アイヌ、琉球人の「民族的」な個性は無視され、さらに中国大陆・朝鮮半島の人々に対する著しい蔑視が、日本人の中に深く根を張っていくことになったのである」

「明治以降の政府の選択した道は、たしかに欧米列強の圧力の中で、江戸時代の武家による支配を打破し、日本国の「独立」を保ったといえ、これは、まったく誤った自己認識の上に選択された道であり、政府によって刷りこまれた虚像におどらされた日本人を破壊的な戦争に導き、アジアの人民に多大な犠牲を強いた、最悪に近い道であったと私は考える」

結 語

網野は「植民地になった方がよかった」などというラジカルな主張を展開しているが、要は、明治の国家の、欧米列強に追いつき、追い越せという性急な国造りが様々なというより致命的な弊害を生んだというのである。ひとつは、明治以前の良い意味での伝統を切り捨てたこと、ひとつは、アジアの国々を切り捨てたこと、その結果、アジアの国々を侵略しその人民と、翻って日本の人民に言葉に言い尽くせないほどの辛酸をなめさせたことである。網野の主張は極端に見えるが、100年200年という長いタームで見れば、あるいは、網野の主張しているとおり、明治維新は「最悪の選択」だったかもしれないと思う。